

原作者・阿部夏丸

1960年愛知県豊田市生まれ。処女作「泣けない魚たち」で第11回坪田譲二文学賞・第6回椋鳩十文学賞をダブル受賞。「オタマジャクシのうんどうかい」で第14回ひろすけ童話賞を受賞した。執筆活動のかたわら「川遊びのワークショップ」や「講演会」活動も多数行う。大人から子どもまで楽しめる川と生き物の話は氏の人柄によるところが大きい。生まれ育った矢作川をこよなく愛し、いまだ川ガキのままである。

脚色・いずみ凜

岐阜県出身。幼いころから演劇に親しみ、大学卒業後、劇団はぐるまに入団。1989年NHKのラジオドラマ執筆をきっかけに脚本家としての活動を開始。東京演劇アンサンブルを経て現在フリー。日本全国のさまざまな劇団の脚本を執筆。児童青少年に向けた作品が多く、子どもからおとなまで共に観て共に語り合える演劇をめざしている。近年の舞台脚本は『くまの子ウーフ』『ハンナのかぼん』『夜空の下に降る花は』オペラ『銀の口バ』人形劇『ねずみ女房 The Mousewife』『岸辺のヤービ』『トクントクン ーいのちの旅ー』など



原作／阿部 夏丸
脚色／いずみ 凜
演出／中島 研
音楽／曲尾 友克
制作／西川 典之

つきちぶれ!

「俺達に何が出来る?」
エイジと仲間たちが企てた作戦の行方。その先に見えた青空、その向こうにあるものは?
元気で明るくクラスの人気者だったエイジは偶然に偶然が重なった事件から、突然「らんぼう者」呼ばわりされてしまう。
「自分は変わってないのに、どうしてまわりの見る目は変わるのか?」
他者との関わり、他人の評価、徐々にはめられていく枠。そんな周囲に戸惑いながらも、自分を貫き通そうとするエイジ。そして、ひとりで立とうとした時に気付く仲間間の存在。

あらすじ

走れ

子どもはしたたかだ。どんな時代であっても、どんな状況が襲ってきても、それを子どもたちの力で上手に乗り越えてきた時代があった。もしかしたら、今の子どもたちだって、自分の力で克服していく力を持っているのだろう。いや、持っているはずだ。実は今の大人社会のほうで、子どもたちを許容することができるかどうか問われているのではないだろうか。目の前にいる子がどうしたいのか、どうありたいのか、何故そうするのかより、その子の行動が世間の常識からはみ出していないかどうか基準になり、挙句の果てに子どもが動くより先に管理や制限をしてしまふ。大人の子どものまなざしが子どもに寄り添うものであった時、初めて子どもたちが生きる輝きを放つはずなのに。
小学校3、4年生のことを総称し、ギャングエイジと呼ぶ。今もそれは変わらないはずである。しかし、周りの評価の中で自らを規制し、自分を表現することが出来ない子どもが増えてきているように思えてならない。
遊んだり、ケンカしたりを繰り返して、その中で遭遇したさまざまなトラブルに対し、排除の論理ではなく、自分の思いをぶつけ合い、這い上がっていく子どもたちの姿を表現してみたい。そんな思いが風の子中部の中からふつと湧き上がってきた。
作家の阿部夏丸氏は語ってくれた。「子どもたちは、どうのこうのと評論する大人が一番信用できない。本質は昔も今も何にも変わっていないですよ。変わったのは、大人社会のありようなんです。だから、僕らはとことん子どもたちを信頼していきましょうよ。」
「ギャング・エイジ」英二を中心に、その仲間たちが、彼らを取り巻く現実に向かい合い、立ち向かっていくことができるのか。それは、私たちのこの時代への挑戦かもしれないと思いがながら。

西川典之

進め

